O.F.D.A.　信州大学工学部准教授

坂牛　卓

TRYING TO REFORM THE EXISTING DIET BUILDING

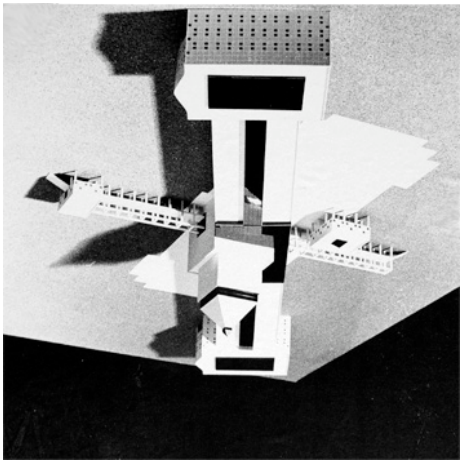
１９５９年　東京都生まれ
１９８３年　東京工業大学工学部建築学科卒業
　　第４回学生設計優秀作品展出展
１９８５年　UCLA大学院建築学科修了
１９８６年　東京工業大学大学院修士課程修了
１９８６年　 日建設計入社
１９９８年　O.F.D.A associates 設立
２００５年　信州大学工学部社会開発工学科建築コース
　　准教授

――― 建築を学ぼうと決めたきっかけは何だったのでしょうか？

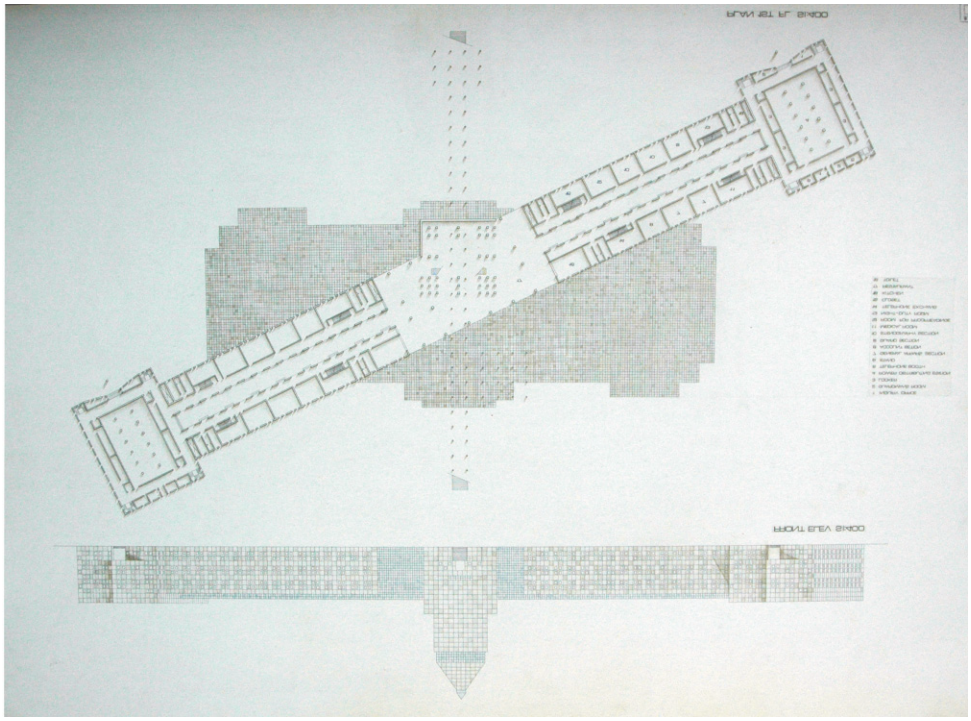
大学受験の際に、将来何をやりたいのか考えた時に、「ものを創りたい」「陶芸がやりたい」と考えましたが、「陶芸では生計が立てられない」と親に反対され、「使えるアート」としては陶芸に似ている建築の道を選びました。大学に入る前から、建築の本は沢山読んでいて、篠原一男が好きで、大学へ入りました。

――― 学生時代、建築をどのように考え、卒業設計に取り組みましたか？

デザインよりもテーマ自体にインパクトを求めて、国会議事堂の改築というテーマを選びました。国会議事堂は大日本帝国時代に建てられたもの。日本国となり憲法も変わっていたので、国会議事堂も新しくなってもいいんじゃないかと思ったわけです。「新機軸」「透過」「残存」「焦点」の四つに絞って、コンセプチュアルに計画案を考えました。「概念的に建築を考える」のが僕ら学生の間では流行っていましたから。どこの大学でもそうだったかというと、そうではなくて、篠原先生が「かたち」よりも、「言葉」で建築を考えるということを一生懸命やっていたし、「概念的に考える」建築家が講師として来ていたので、自然と僕たちもそういう風に考えるようになっていました。他大学から見学に来た学生のなかには、「こんなのは建築じゃない」と言って、帰ってしまう人もいました。（笑）



模型写真



前立面図・１F平面図

――― では、今はどんなことから影響を受けていますか？

建築からはあまり影響を受けていません。建築から学ぶこともあるけれど、人文や哲学、社会学とかそういったことからヒントを得ないと、創れないんじゃないかと思っています。

――― 今は指導する立場にいるわけですが、学生の設計を見てどう思いますか？

僕は社会的なことが好きだけれども、講義では、社会的な問題だけでなく、哲学的な問題もアート的な問題も扱っているので、その中から、アートと建築との関係だったり、アート的な問題に興味を持つ人が多いですね。僕らの頃は、建築は工学だったから、大規模な再開発計画やプロジェクトを立てるのが主流で、アートを取り上げる人なんていませんでした。僕は、卒業設計で改築をやったけど、今あるようなリノベーションや歴史的建造物の保存・再生とつながるものではなかった。アートも保存・再生もそうだけど、僕らの時代には、なかったテーマが出て来ている。建築に求められているものが変わってきているなと感じます。

「どうしたら建築は社会にコミットできるか」

どうしたら建築は社会にコミットできるか、考えて来た。そのスタートは卒業設計だったのかもしれない。だけど、国会議事堂が変わったからと言って、政治が変わるわけではないことは自明だった。修士論文でも超高層ビルをとりあげて、建築が社会に対してどれだけの力を持つのかを考えたりもしました。熱望してやってきたけど、それはとても難しかった。

――― 先生の作品は窓が特徴的と言えると思うのですが、社会性との関係は？

直接的ではないのかもしれないけど、窓を通して内と外の互いに見る・見られるの関係が生まれる。建築と社会をつなぐ穴を窓として考えた。内と外をつなぐということはつまり社会性だと考えている。

――― 建築を面白いな、好きだなと思う瞬間は？

つらいと思うことも多いけど、設計した建物が出来上がって来て、想像以上にいいな、と思えた瞬間は、建築をやっててよかったなと思います。

インタビュー：法政大学 寺島 明/野中 蘭